

まもなく令和！ 平成の「暮らし」と「食」をデータで振り返る ～第4回 平成30年「価値観の変化」～

東京ガスグループは、首都圏を中心に日本のエネルギー供給の一翼を担っています。また、お客さまの生活のお役に立てるよう、さまざまな取り組み・活動を行ってきました。

1986年設立の「都市生活研究所」は、多面的な調査・分析をもとに、都市生活者の暮らしを創造するための提言を行っています。

まもなく「令和」に改元される今、都市生活研究所では、東京ガスが蓄積してきたデータを基に、「平成」という時代を、ある家族の物語とともに4回の連載で振り返る都市生活レポートを発行します。

最終回となる、この第4回では、「価値観の変化」をメインテーマに、平成30(2018)年を振り返ります。



【本連載に登場する佐藤家の紹介】

昭和31年生まれの夫・隆は保険会社に勤める会社員。4歳年下の妻・恵子は職場結婚後、専業主婦になりましたが、子育てが落ち着くと事務の仕事を始めました。昭和61年生まれの長女・愛、昭和63年生まれの長男・翔太は、すでに結婚や就職で実家を離れました。この家族が生きた「平成」を振り返ります。



夫・隆
昭和31(1956)年
生まれ



妻・恵子
昭和35(1960)年
生まれ



長女・愛
昭和61(1986)年
生まれ



長男・翔太
昭和63(1988)年
生まれ



愛の夫・大輔
昭和61(1986)年
生まれ



愛の娘・葵
平成28(2016)年
生まれ

■第4回■ 平成30(2018)年を振り返る

【時代の背景】

マスコミでは連日のように「人手不足」が報じられ、企業にとって労働力確保は待ったなしの課題となりました。

「働き方改革」が進められる中、企業も大きな変化を迫られます。その1つが、多様な人材を積極的に活用する「ダイバーシティ」の推進でした。

【家族の物語】

長女・愛は32歳になり、夫との間に誕生した娘は2歳になりました。夫より早く出社するため、朝食作りと保育園への送りは夫の仕事。お迎えは愛の担当ですが、残業の日は近くに住む母・恵子が代わりに行ってくれています。

長男・翔太は外資系企業に勤め、ワーク・ライフ・バランスをうまくとった人生を楽しんでいます。62歳になった父・隆は再雇用で、今も保険会社に勤め、恵子は仕事と孫の世話で、忙しくも、充実した生活を送っていました。



夫 隆 (62歳)



妻 恵子 (58歳)



長女 愛 (32歳)



愛の夫 大輔 (32歳)



愛の娘 葵 (2歳)



長男 翔太 (30歳)

1. 「価値観の変化」

男女間の感覚も、会社選びの感覚も、消費の感覚も、世代間ギャップがあります。



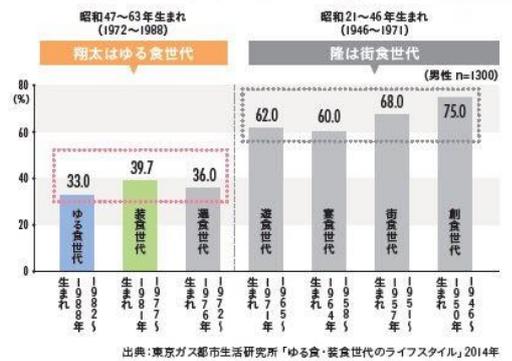
(1) 若い世代では、ワリカンがふつう ～彼女とのデートで、おごろうとしない翔太。心配してしまう隆～

「えっ、彼女とのデートでワリカン？それで大丈夫なの？」。隆の語気があまりに強かったので、翔太は「彼女も働いて稼いでいるわけだし……」と答えるのが精一杯で、たじろいでしまいました。

隆が独身だった時代、デートの費用を女性に負担させることは、どちらかというところ「非常識」でした。

「デートの食事代は、男性が払うのが自然だ」という設問に「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた男性の割合は（右のグラフ参照）、世代によって明確に異なりました。昭和46（1971）年以前に生まれた「創食～遊食」世代は6割以上が「男が払うもの」と答えたのに対し、昭和47（1972）年以降に生まれた「選食～ゆる食」世代は3～4割。バブル期までの世代と就職氷河期以降の世代で、価値観が大きく異なっているようです。

デートの食事代は、男性が払うのが自然だ



世代間で大きなギャップが見られます

※「食・世代」については、参考1を参照

(2) 「定時で帰れない会社はNG」の若者が増加 ～海外文化にもなじむ翔太は、隆に理解できない感覚の持ち主～

翔太は30歳。外資系企業に勤め、会社から30分圏内にあるシェアハウスで外国人と生活しています。「毎日、18時には帰ってみんなと料理するんだ。いろんな国の仲間がそれぞれ自国の料理を作るから楽しいよ」と言うのではないですか。定時には帰るけれど、仕事には大きなやりがいを感じている——。んんん？このあたりの感覚が、隆にはピンときません。

右のグラフは、昭和52（1977）年～昭和56（1981）年生まれの「装食世代」と昭和57（1982）年～昭和63（1988）年生まれの「ゆる食世代」を対象に「定時で帰れない会社には勤めたくない」かどうかを聞いた結果です。「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた人の割合は、「装食世代」の24.9%に対して「ゆる食世代」は40.3%。無理をしない「ゆる食世代」の特徴が表れています。

定時で帰れない会社には勤めたくない



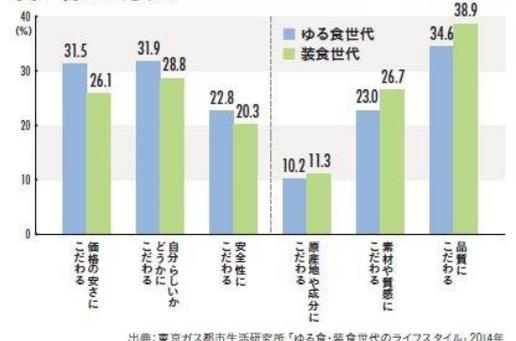
世代間の年の差は最大11歳でもハッキリと分かれました

(3) 世代間で、買い物の基準も変化 ～翔太の世代は、自分らしければ安いものでもいい～

久しぶりに実家で週末を過ごしている翔太。リビングのソファに横になってテレビを観ています。傍らで恵子が洗濯物を畳んでいると、ふと翔太の腕時計に目が留まりました。両親が高校入学の際にプレゼントしたものでした。「まだその時計してるのね。買い替えればいいのに」と恵子と言うと、「いいよ。まだ全然壊れてないし、気に入ってるから」。

「装食世代」と「ゆる食世代」を対象に「買い物をする際に、どんな点にこだわるか」を聞きました（右のグラフ参照）。両世代を比べると「品質」「素材・質感」「原産地・成分」にこだわるのは「装食世代」のほうが多いのに対し、「安全性」「自分らしさ」「価格の安さ」にこだわる人はゆる食世代に多いという結果に。「無理せず、構えず、自分らしく」という、「ゆる食世代」の特徴が出ています。

買い物のこだわり



翔太の世代は、とくに価格面を気にします

2. 「全員子育て」

ママがフルタイムで働くのが当たり前。
支え合っただけの子育てが必須の時代です。



(1) 「共働きママ」の忙しさが際立つ

～夫は協力的でも、「自分の時間」はほとんどない愛～

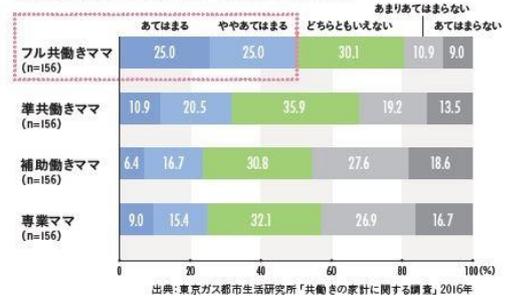
「行ってきますっ！大輔、悪いけどあとお願いね」

長女の愛が、朝食もそこそこに出かけていきます。3年前に結婚して1児の母。実家のそばにマンションを購入し、今も正社員としてフルタイムで働いています。

愛の夫・大輔は大学時代の同級生でメーカーの研究者。愛の実家近くに住むことに賛成してくれました。恵子は出勤日を減らして週2回、保育園へのお迎えを手伝っていますが、自分の子育て時代とはまったく異なる「共働きママの忙しさ」に驚くばかりです。

右のグラフは、ママたちの時間意識に関する調査結果です。働き方で分けた4タイプを比べると、フル共働きママは「時間をお金で買いたいと思うことがある」と答えた割合が他のママたちに比べて高く、「時間が欲しい」という切実な思いが表れています。

時間をお金で買いたいと思うことがある



「あてはまる」が他のママたちの何倍もの数値になっています

※「共働きの定義」については、参考2を参照

(2) 夫の家事は、妻の評価を得られていない ～愛の夫・大輔は、朝も晩もしっかり協力しているが…～

愛の夫・大輔が、仕事の休憩中に先輩研究者と話しています。「いやあ、仕事しながら子育てはたいへんですねえ。楽しいですけど」「ちゃんと分担してる？家事とか育児とか」「朝は子どもを保育園へ送って、夜は夕食の片付けや部屋の掃除、風呂も洗っています」

なかなか自信たっぷりですが、果たして愛は、大輔の協力が満足しているのでしょうか――。

子育て中のママとパパに「夫と妻の家事分担比率は？」と聞いたところ、フル共働きパパでは「自分は2割以下」と答えた人は30%であるのに対し、「夫は2割以下」と答えたフル共働きママが半数以上という結果が出ています。以前に比べると、家事分担している夫は増えていますが、自分が思うほど妻の評価を得られていないケースも多いようです。

夫と妻の家事分担比率



頑張っているつもりでも、妻の評価はなかなか上がりません

(3) 「共働きママ」の半数は、母親の協力あり

～子育てしながらフルタイムで働く愛の生活は、両親の支えがあってこそ～

今日は、恵子が孫の葵を保育園へ迎えにきました。「あおちゃん、おばあちゃんがお迎えに来てくれたよ！」と、保育士さんが明るい声で呼びかけます。

隆と恵子は、葵の保育園の行事に参加したり、葵が急に熱を出したときに面倒を見るなどの手助けをしています。家族の誕生日などの際には、みんなで集まってお祝いをしますが、愛と大輔夫婦は「父さん、母さんが近くにいなかったら、働きながら子育てなんて無理だよ」と、両親の協力が心から感謝しています。

右のグラフは、内閣府が行った調査で、「第1子が1歳時に妻が就業したケースで、子の祖母から子育ての手助けを受けた割合」の年代別推移です。共働きが多数派になっている今、「祖父母による育児・家事支援」がますます重要になっています。

祖母から子育ての手助けを受けた割合の推移



最近では夫方の母親に助けをもらうママは少数派

3. 「ウチ余暇」

仕事より余暇、アウトドアより家、「家でゆっくり」が好まれています。

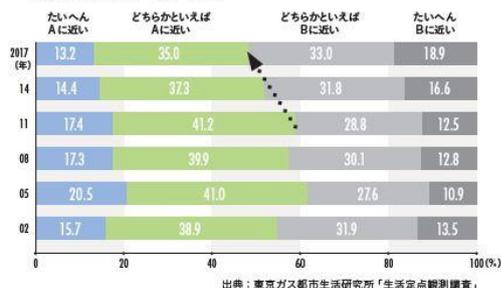


(1) 「余暇重視派」が、「仕事重視派」を超えた ～翔太と大輔はプライベート重視、愛の答えは「ハーフ・ハーフ」～

今日は、隆の62歳の誕生日。家族全員が実家に集まってお祝いです。楽しくワイワイやっていたのですが、究極の話題に突入しました。それは「仕事とプライベート、どちらが大事か」です。愛は半々とお茶を濁し、大輔はプライベートと答えました。翔太もちろん、プライベート重視。隆は、自分の現役時代を思い返すと、「仕事だった」と答えざるをえませんでした。本音では今でも「仕事のほうが大事」と感じています。

次のグラフは、「生活の力点を、仕事と余暇のどちらにしているか」を聞いた結果です。平成23(2011)年以降、「余暇にしている」という人の割合の増加が続き、平成29(2017)年の調査で初めて「余暇重視派」が「仕事重視派」を上回りました。仕事について、自己実現のためという人は減少傾向で、意識の変化が見られます。

今の生活では、力点を「A.仕事にしている。」
「B.余暇にしている。」



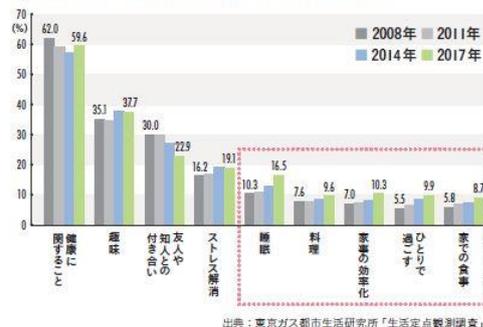
15年間の調査で初めて、
余暇重視派が半数を超えました

(2) レジャーより、「何でもない日常」が大切 ～愛の夫・大輔は、家族でゆっくり家で過ごすのが大好き～

隆の話を受けて、愛が話し始めます。「私の会社にも『自己実現の1つ』と考えて、仕事に没頭している人がたくさんいるよ。反対に『生活の糧を得る手段』と割り切っている人もいる。私は中間だけど、お父さんの時代に比べていろんな価値観があるんだよ。あとね、休日の使い方も人によって全然違うよ。大輔なんて、家にいるのが大好きなんだから」

愛が言うように、休日の過ごし方も多様化が進んでいて、遠出してレジャーを楽しむというよりは、大輔のように「家でまったり」を好む人たちが増えています。次のグラフのように「今後の生活で重視して行ってきたいこと」として、「睡眠」「料理」「家での食事」の増加は特徴的。あわただしいからこそ、積極的に心身を休めることが大切にされている面もありそうです。

今後の生活で重視して行ってきたいこと



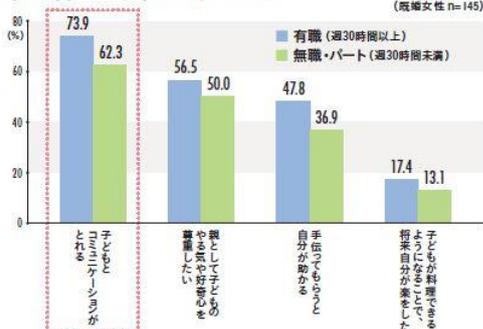
家での「日常な生活行動」に
重点が置かれています

(3) “料理をすること” 自体の価値が高まる ～愛の心からの願いは、葵と“フツウ”の生活すること～

みんな集まったの隆の誕生日、恵子が手料理をふるまいました。「このポテトサラダ、愛のと同じ味！」と、大輔はうれしそう。恵子が「あおちゃんにも受け継いでね」と言うと、愛はこう答えました。「うん。葵が小学生くらいになったら、一緒に料理したいなあ」

共働きママは非共働きママより「料理は自分を表現するもの」と考える傾向があるようです（東京ガス都市生活研究所「子育てママの食事情 2016」）。また、次のグラフのように、料理をする時間も「子どもとコミュニケーションがとれる」として、大切にしたい気持ちがうかがえます。平成という時代の終わりに、あらゆる多様化が進む中、家での日常を大切に「新しいフツウの暮らし」が始まっているようです。

親子料理を日常的に行う理由



忙しいママほど、親子料理の
価値を感じています

■参考 1：都市生活研究所オリジナル世代区分「食・世代」

「食・世代」は、都市生活研究所が作成した世代区分であり、昭和生まれ（昭和元年～昭和63年生まれ）の生活者を「食」という切り口で定義しています。「食・世代」の定義は、人口の増減や経済状況といった社会背景を踏まえた上で、幼少期から現在までの食生活の実態、食に対する意識に関する調査を実施し、その分析結果から導き出したものです。

食生活は、時代背景（社会事象、流行、教育）や生活者の価値観の変化などと密接に関わりあっています。そのため「食・世代」は、食分野のみにとどまらず暮らし全般において、生活者の価値観や行動の特徴を示すことができると考えられます。

「食・世代」9世代の食の特徴

粗食世代 1926年～1935年 (昭和元年～昭和10年)生まれ	粗食を経験、とにかく食べられることに感謝する世代 食べられるだけで幸せ。幼少期に食べることに困窮した経験があり、根底に食べ物のありがたみを心底感じている世代。
整食世代 1936年～1945年 (昭和11年～昭和20年)生まれ	バランス良くちゃんと食べる食習慣を整えた世代 ちゃんと食べる。疎開や初の給食を経験した世代が大人になり、バランスの取れた食事を意識するようになった世代。
創食世代 1946年～1950年 (昭和21年～昭和25年)生まれ	飛躍的に食生活が豊かになり、新たな食文化を創った世代 戦後の新たな食文化の創成。 欧米文化に触れ、日本の新たな食文化を創りはじめた世代。
街食世代 1951年～1957年 (昭和26年～昭和32年)生まれ	外食形態が多様化し、街でも自由に食事ができるようになった世代 家庭ではレトルト食品やインスタント食品などでの省力化も知り、様々な外食形態も増え、食のシーンの幅を拡げた世代。
宴食世代 1958年～1964年 (昭和33年～昭和39年)生まれ	バブル(宴)の時代に若い社会人であり、贅沢な食を経験した世代 食の贅の極みも認知・経験するとともに、同時に、ハレとケの食のシーンの幅の拡大を知った世代。
遊食世代 1965年～1971年 (昭和40年～昭和46年)生まれ	遊び心を持って食を楽しむようになった世代 家庭での調理の省力化から外食の形態まで、様々な食のシーンで食をエンタメ化して選択肢を拡げた世代。
選食世代 1972年～1976年 (昭和47年～昭和51年)生まれ	食の安全性など自分の価値観にあった食を選択する世代 前の世代までが創り出し、出揃った感のある食の選択肢から、自分の価値観に基づいて取捨選択をした世代。
装食世代 1977年～1981年 (昭和52年～昭和56年)生まれ	日常の食をオシャレに装い、楽しむ世代 男女ともにカフェやスイーツ、新食材に高関心で、日常の食をおしゃれ化し、楽しむ世代。
ゆる食世代 1982年～1988年 (昭和57年～昭和63年)生まれ	食へのこだわりや男女の役割などの規範意識が薄い(ゆるい)世代 料理に対する男女の役割意識が最もフラットで、かまえることなくゆるやかに自分の食スタイルを模索する世代。

■参考 2：「共働き」の定義

一口に「共働き」といっても、妻がフルタイム正社員の家庭と週2～3回の短時間パートの家庭では、ライフスタイルや価値観は異なると考えられます。そのため、都市生活研究所では、妻の働き方によって子育てファミリーを以下の4つのタイプに分類し、定義しました。



※夫はすべて、週30時間以上就労の被雇用者